

北河内地区 実技研修会

水墨画(南画)の研修から

1.はじめに

枚方市は、大阪府の北東部、淀川沿いの京都と大阪を結ぶ街道上に位置する。現代では、人口 40 万人の中核市である。また、京阪電鉄の沿線の主要都市でもある。市内には、19 校の中学校と 44 校の小学校が所在する。

この枚方に大阪美術学校が開校されたのは、昭和 4 年のことである。この学校は、もともと大阪市内に所在していたが、当時の牧野村村長と京阪電鉄の協力により、昭和 4 年に御殿山に移転、開校した。初代校長は、矢野橋村で、彼は、日本南画院の創設者の一人である。研修会を開催した今年も、この矢野橋村没後 60 年にあたり、御殿山生涯学習美術センターでは、回顧展が開催された。現在の京阪電鉄御殿山駅は、大阪美術学校の設置に伴って作られた駅である。

学校教育における水墨画の導入は、2006 年の教育基本法の改正による。これは、『第二条 五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。』とあり、墨を使った教材が導入されるきっかけとなった。これを受けて 2008 年の学習指導要領の改訂において、中学校「美術科」の学習指導要領「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い 2(1)」において、「表現」の指導にあたっては「ウ 日本及び諸外国の作品の独特な表現形式、漫画やイラストレーション、図などの多様な表現方法を活用できるようにすること」「エ 表現の材料や題材などについては、地域の身近なものや伝統的なものも取り上げるようにすること」とされ、教材として水墨画が取り上げられるようになった。

水墨画の指導方法は、全国各地の中学校で研究されており、さまざまな創意工夫が凝らされた授業が展開されているが、教科書などでは、雪舟と現代作家の紹介がなされており、これらをつなぐ部分が欠落している。しかし、「伝統と文化」と認識した以上、これらの歴史的なつながりを省みることなく、その良さや面白さを伝えることは難しい。墨と水を使えば、自ずと伝統と文化たりえとは、考えにくい。また、例えば、水墨画は、渡辺華山、与謝蕪村、田能村竹田など国語や社会の教科書に取り上げられる作家はいるものの、彼らは、美術の教科書や美術年表に取り上げられることはない。水墨画の歴史を踏まえて学習指導を行うにあたって、水墨画、文人画、南画の系譜において指導を計画することが必要であると考えたことから、今回の夏季実技研修の講師を日本南画院に依頼するに至った。

2.研修会の実施にあたって

日本南画院より副理事長の月居和子先生を紹介していただき、指導を受けて実技講習に向けて準備を行なった。準備にあたり必要な画材や備品の確保に困難が生じた。それは、画墨、画筆、下敷きの確保である。画墨は、「青墨」、画筆は、「長流」、紙は、「画仙紙」下敷きは、60×90 センチの白色、硯、彩色皿 3 枚である。紙は、講師からご寄贈いただいたものを使用したが、墨、筆、下敷き、絵皿については、これを参加者にも準備していただくことは困難なことと考え、主催者として準備することにした。しかし、画墨や筆、下敷きについては、市販品は高価で手が届かず、墨は製造元に B 級品や廉価な商品を問い合わせたが、そのようなものはなかった。

そこで、中国の通販サイトである淘宝を利用して類似品を準備することにした。墨、筆、下敷きをすべて40セット準備したが、1万円そこそこそれなりの価格で準備することができた。さて、参加者には硯を持参するように連絡し、当日持参していただいたのだが、問題が生じた。それは、現在使われている硯がプラスチック製で墨が擦れないことであった。参加者自身がそのことに気がついていなかったことから教材を準備する際に注意が必要である。

実技講習会の会場は、例年自分の所属する学校で行なっていたが、現在所属する学校は、所在地が交通に至極不便なところであるため、枚方市立教育文化センターの理科実習室を借りることにした。ところが、この実習室は、基本的に貸し出されておらず、利用に当たっては、センターの職員の指示に従って、教育委員会研修課の課長宛に依頼文を送付し許可を取った。元々、枚方市立御殿山生涯学習センターに日本画の画室と道具が一式揃っていたのだが、日程が決まった時点ですでに予約が埋まっており、苦肉の策となった。

実習は、午前中に同じ会場で枚方市教科教育研究会中学校美術班の研修を行い参加者の便を図った。参加者は12名、北河内の研修会であるが、豊中市から貝塚市まで府下より広く参加者を得ることができた。

実習内容は、枚方と南画についてのお話し、実習に移ってから墨を擦ること、墨や筆法の基本的な事柄についてご指導いただいた。そして、水墨画の基本的な画題である、「四君子」のうちから、「竹」の実習を行った。はじめに講師の実演を見学したのち、それぞれが実習を行った。始めてからすぐに静かになって、黙々と実習に取り組んだ。実習を始めてすぐに気がついたことは、一本の墨の線が、自分の思うようにひけないことである。筆勢、濃淡、10回引けば10本の線が生まれる。そして、その中に自分の思う線が現れないこと。思う線が引けるようになるためひたすら練習する姿が見られた。講師が一人ずつ机を回り、手本を書いてくださり、それを見ようみまねで取り組むもののそれが形にならない、難しさと面白さに全体が静かに熱気を帯びた雰囲気になった。一枚の画面の中に竹を描くもののその太さ、大きさ、形はそれぞれで異なり、個性的な作品が生まれる。それは、あたかも手本から昇華されそれぞれが自分らしい竹の絵を描くことができるように感じられた。

瞬間に1時間が過ぎ、続いて蘭の実習になった。蘭もまた竹と同じように見ても真似できず、それぞれが自分の思う花を描けるようになるまでずっと練習を続ける様子が見られた。そして、2時間が過ぎ、誰もが短すぎると感じた研修会となった。

今回は、研修会の担当だったため、自分が研修に参加することはできなかったが、一本の線を引くために繰り返し線の練習をする姿は、剣道の素振りの様子を見るが如くのような感じだった。一本の線を引くために集中すること、やり直しができないことは、水墨画の醍醐味であり、学ぶべきことであろう。「四君子」のような型はあるものの、個性はその型に埋没することなく、逆にその型から自らの個性を見出すことができるのではないかと、それは、剣道の試合を見ることのようにだと実感させられた。

確かに墨と水を使えば水墨画になるものの、これまでの画題を画材を置き換えただけでは、南画(水墨画)の学習とは言えないということを理解できた。また、作品鑑賞においても画題のみならず、表現の方法についても、どのように表現できるのか、その奥行きや面白さを伝えることが指導において大切なことだと気付くことができた。

型を習得し、その型から抜け出すことは、つまり、守破離の流れで捉えることができ、武道や茶道、華道と共通する要素であるに違いない。

そこに伝統文化としての水墨画の可能性を見出すことができると考える。

3.まとめと展望

今後、中学校の美術科においてどのような教育活動を実践できるかについてまとめ、今後の教育活動の目標としたい。
まず、この大阪という地において南画(水墨画)の教育活動を実践する上で、学校の美術教育の現場で注目されてこなかった田能村竹田、与謝蕪村など大阪あるいは関西にゆかりのある作家について学習することが必要である。しかし、美術史でその分野に焦点を当てた概説書がないし、研究者もほとんどいない。

けれども、その内容は、「エ 表現の材料や題材などについては、地域の身近なものや伝統的なものも取り上げるようにすること」とも合致するし、大阪で生まれ育った生徒たちにとっては、身につけるべき素養であると考ええる。それは、地元理解となり、地域を愛する人材を育成することにつながる。

次に実習についてである。ICT 機器の普及により、教室で容易に画像検索が可能になり、生徒の作品制作に対する意識について明らかな変化が見られるようになった。例えば、教育現場でよく用いられるアプリの CANVA は、その最たる例であろう。それは、一から発想して創作するのではなく、既存の情報から自分の目的にあった情報(画像)を検索して取捨選択することである。このことについての是非はあるが、水墨画ではすでに「芥子園画伝」のような定型化された手本があり、これを元に多様な表現を行うことが可能になっている。そして、素晴らしい作品が制作されている。このことから写生やデッサンのように写実的な表現とは別の表現方法の選択肢として学ぶことは、生徒自身が多様な表現を行うことを可能とするだろうし、既存の情報をまとめて自分なりの表現を行うとした、現代的な表現手法に合致すると考えられる。

一方、今回の研修会で分かったことは、実習のための画材の準備である。画墨、筆ともに教材としては、おそらく、ポスターカラーセットを上回る価格になることが想定される。生徒が個人購入するには、保護者の負担が大きくなるだろう。また学校教材用のものもない。これを硯や画仙紙と合わせて市費で準備するとすると、少なくとも十数万はかかるだろう。ためしにやってみるには初期投資が高額である。一コマ 50 分の制限された時間の中で、墨をすること、描くこと、片付けることを考えるとこの全てを取り組むことは難しい。

また、「四君子」のような定型化された課題の練習が、生徒の興味関心をどれだけ惹きつけることができるか不安が残る。その課題の奥行きや面白さを生徒に伝えるためには、指導者にも相当な技量が必要になると考えられる。それをどのようにして身につけることができるか、指導する側にも高い意識が求められる。

伝統的な指導方法を習得し、指導するのか、生徒の実情に合わせた題材と指導を実践するのかなど検討事項は多い。

ただ、必要なことは、すべての準備ができてから行うのではなく、できるところからできる範囲で取り組むことが大切であると考えたい。

そして、「物質偏重の病根を断ち、水墨を根幹とした新時代の南画創造のため」
(現代南画協会設立趣意書より)とあるように、従来とは異なる美術的価値観を生徒が身につけることは、美術のみならず、生徒自身の人生の一助とすることができるだろう。

文責 関野泰一